



歲月人を待たず

校長 清水 一司

正門脇の白木蓮が花芽を膨らませ、卒業式の準備をしています。早いもので3年生を送り出す時期となりました。本年度の学校だより第1号で「生徒には、いつ訪れるかわからないカイロスの前髪を確実に掴むことができるように、探究心をもって勉強や運動にねばり強く取り組んでほしい。」と書いたのが4月。あれからの11か月の時を振り返れば、私自身がカイロスの前髪を掴む準備をしていなかったのではないだろうか、後悔と反省しか残っていません。時間は私の都合とは関係なく、あっという間に過ぎ去ってしまいました。「歲月人を待たず」とはこのことでしょう。

不思議なもので歳を重ねるごとに、1年の時間が経つのが早くなったように感じてなりません。子どもの頃は、もっと時間がゆったりと流れていたように記憶しています。しかし、この数年は、出勤して机に向かい、気付くと夕方になっていたということが多くなりました。このことについて、フランスの哲学者ポール・ジャネーは「人生のある時期に感じる時間の長さは、年齢の逆数に比例する。」と言っています。かみ砕いて説明すると、「1歳の時に感じた1年を1分の1とした場合、2歳の時の1年は2分の1となり、1歳の時の2倍早く感じるようになる。同じように、10歳の子は1歳の時の10倍早く感じ、50歳の子は1歳の時の50倍早く感じる、つまり50歳の人の1年は1歳の子の7日程度に感じる。」ということです。道理で年を追う毎に1年の時間が経つのが早く感じるわけです。

ところが、時間が早く過ぎ去る感じを食い止める方法があるというのです。それは、何か新しいことに挑戦すること。そうすれば子どもの頃のように時間の流れがゆったりとしたものを感じられるのだそうです。そう言われてみれば、子どもの頃は出来事の全てが新鮮で、毎日が挑戦の連続だったような気がします。それで時間の流れが今よりもゆったりと感じられたのかもしれない。大人の皆さんであれば、誰でも心当たりがあるのではないのでしょうか。反対に、毎日が同じことの繰り返しだと、時間があっという間に過ぎてしまうように感じるのだそうです。どうやらこの数年の私は、新たに何か挑戦することなく、漫然と過ごしたために時間が経つのが早く感じていたようです。

「歲月人を待たず」は、1世紀中国の詩人陶淵明^{とうえんめい}の詩の一部です。この言葉は「盛年重ねて来たらず 一日再びあしたなり難し 時に及んで当に勉励すべし (若い時は二度と来ない 一日に朝は二度とない 時を逃さず一瞬を大切にしてお勉強に励めよ)」の後に続きます。本校では、「自ら学び、進んで考える生徒」を求める生徒像の一つに掲げて教育活動を展開してまいりました。本校生徒には、戻ることの無い今、とどまることの無い時間を大切に、努力し続ける人間になってもらいたいと願っています。